

つみき BOOK 中 補足課題

今回、つみき BOOK 中の課題チェックリストを作成する過程で、追加した方がよいと判断した課題について、Excel 版課題進行表に加えた上で、以下に教え方を記載した。つみき BOOK 中には、次の増版の際に収録する予定。

2023.8 藤坂龍司

○所有関係の尊重 (C3S1)

目標：他人の物をとらない、という行動を身に着けさせる。本来の所有物だけではなく、幼稚園などで、他の子どもがおもちゃを使っているときは、そのおもちゃを勝手に取らない、ということ（占有物の尊重）も教える。

教え方：

<おやつや食事>

①おやつの時間を利用する。テーブルに向かい合ってすわる。おやつを二つ用意するが、最初はわざとあなたの前にだけおやつを置き、子どもの前にはおかない。(あなたがお母さんなら)「これはママのよ。食べたらだめよ」と言う。そのまましばらく待つ。子どもがあなたのおやつに手を出そうとしたら、「だめ。ママの」と言って制止する。「お手手ちゃん」と言って手を出さずに10秒くらい待てたら、ほめて、子どもの前におやつを出してあげる。待ち時間は1分くらいまで少しずつ伸ばしていく。

②同じくおやつの時間に、おやつを二皿用意する。一皿は子どもの前に、もう一皿はあなたの前に置く。それぞれクッキーか何かを3つくらい入れておく。子どもと一緒に食べ始めるが、あなたはわざとゆっくり食べて、子どもが食べ終わった後も1, 2個残しておく。子どもが手を出そうとしたら、「だめ。ママの」と言って制止する。一定時間待てたら、強化する。

③日常生活でもこれを徹底する。もし兄弟がいたら、おやつの時間に兄弟の物を取らない訓練をする。「ちょうだい」と言っても与えずに我慢させる。食事の時間も他の家族のお皿の物を勝手に取らないようにしつける。親はつい自分の物を取られても大目に見てしまうものだが、無断で取ることは許さないようにする。ただし親の物は、「ちょうだい」と言わせてから与えてもいいだろう。

<おもちゃ>

例えば電車遊びをする。子どもの好きな電車をわざとあなたが使い、子どもにはそれほど好きではない、別の電車を与える。「これはママ(先生)のね。〇〇ちゃんはこちら」などという。子どもが自分の好きな電車をとろうとしても、渡さない。しばらく我慢して遊べたら、ほめて交換してあげてもよい。兄弟や他の子どもの物を取る傾向のある子どもの場合は、この課題を徹底して行う。その上で、集団場面に般化させる。

集団にいるときに、誰かがそばについて、子どもが他の子どもの物を取ろうとしたら、すかさず制止する。取ってしまったら、すぐに返させる。どんなに泣き叫んでもがまんさせる。必要なら一時的にその場から去らせる。落ち着いたら元に戻す。これを何度でも繰り返す。すでに「貸して」などと頼む行動を身に着けているかもしれないが、ここでは要求するのではなく、我慢させるところに目的がある。いずれにしても、普通は他の子どもが遊んでいる物を、「貸して」と要求するのは厚かま

しいし、拒否されることも多い。だから現に他の子が使っている物については、「貸して」と言わせず、我慢させること。

<なわばり>

他の子どもが遊んでいる空間に、平気で割り込んで行く子どもが多い。その場合は、そういうことをしないように訓練する。例えば公園で、一つしかないブランコに誰かが乗っている場合は、その子がどこかに行くまで、がまんして待つように訓練する。砂場では、他の子どもが遊んでいるスペースに踏み込まないように、「○○ちゃんはこちらよ」と空いているスペースを指示し、そこで遊んでいたら強化する。砂の上にラインを引いてやってもよい。他の子どものスペースに侵入しようとしたらさかさず制止する。

○多要素指示（B 1 S 3～）

目標：色、形、基本的な形容詞、位置などの概念を組み込んだ指示に応えられるようにする。

教え方：例えば色×物がわかるようになったら、それを指示の中に組み込む。「赤いクレヨン貸して」「黄色いブロック入れて」など。あまり難しいものは避けて、日常生活でよく使いそうな言い方を教えるとよい。

項目：

- ①色：「緑の折り紙出して」「オレンジの靴下をはきなさい」など
- ②形：「丸い積み木積んで」「四角いクッキーちょうだい」など
- ③形容詞：「大きいスプーン、パパにどうぞして」「小さいお皿にニンジン入れて」など
- ④位置：「これをテーブルの上に置いて」「これをストーブの後ろに隠して」

○全体指示（B 1 S 3～）

目標：集団場面で、全体に向けて先生が出した指示に応えられるようにする。

教え方：

①家庭で、サークルタイムなど、家族やお友だちの協力を得て、小集団をつくる。誰もいなかったら、人形で代用する。大人の一人が先生役になり、一人ずつ個別に指示を出したり、全体に出したりする。全体指示の時は、子どもの方を見ないで、集団の中心あたりを見て、「立って下さい」などの指示を出す。最初はプロンプト。指示に従えたら強化。徐々にプロンプトをフェーディング。

②実際の幼稚園などの集団場面で、シャドー役の大人が、担任の先生の言葉に子どもの注意を向け、先生が全体指示を出したらすぐに肩を軽く触れるなどして、プロンプトをする。子どもが正しく反応したら、小声でほめるなどして強化する。

○援助を求める（B 7 S 3～）

目標：自分が一人ではうまくできないとき、「手伝って」「助けて」と身近な人に助けを求めることができる。

教え方：子ども一人では完成できない、少し難しい課題（ハサミやのりを使う工作など）をさせる。子どもがうまく行かなくて困っているところで、「手伝って」などと大人が言って、まねさせる。「手伝って」と言えたら、手伝ってあげる。ほめてもいいが、ほめなくても、手伝ってもらえて課題が完成できることが強化子になる。

何でも自分でやりたい、困っていても人（親）に頼みたくないタイプの子どもの場合は、いきなりこの教え方をしてもうまく行かない。そういう子どもには、まず援助を受け入れる姿勢から育てなくてはならない。そのためには、①子どもに課題達成のプレッシャーを与えすぎないこと、②自力で達成できる課題ばかり出さないこと、③大人と一緒にやって完成できた喜びを味合わせること、が大事。

①は、子どもが成功できないときに大人がイライラしたり、「ほら、できないでしょ。貸しなさい」などと否定的な言い方をすると、子どもはむきになって、接待に頼もうとしなくなる。あるいは逆に達成意欲をなくし、無気力になる。どちらも好ましくない。一人でできないときは、すばやく最小限のプロンプトを穏やかに与えて、できたらまるで子どもが一人でやったかのように、「できたね」とほめてあげること。そうすれば喜んで援助を受け入れるようになる。

○先生ごっこ（C3S3～）

目標：子どもが先生役になって大人に指示を出す。

趣旨：これはロバース博士のテキスト「ザ・ミーブック」に、子どものやる気を引き出す課題として取り上げられているもの。一時的にその場の主導権を子どもに取らせることにより、子どものモチベーションを高めることを狙いとする。ロバース博士によると、多くの子どもがこの課題を好み、この課題に取り組んでから積極性が増したという。この課題には、子どもが先生の役を演じる、というごっこ遊びの面もあるので、ここで取り上げることにした。

教え方：「代わりばんこ」を応用する。例えば子どもにいくつか音声指示を出した後、「今度は○○ちゃんが先生になって」と言って、それまであなたがいた位置に子どもを座らせる。子どもが戸惑っていたら、『バンザイ』って言って」と、音声指示を出すように促す。子どもが「バンザイ」と言ったら、両手を挙げて見せる。『あたま』って言って」と言い、「あたま」と子どもが言ったら、あたまにさわってみせる。そのうち、プロンプトしなくても、要領をつかんで、いろんな指示が出せるようになるだろう。いつも上の立場にある大人を、自分が思いのままに動かせる、ということ自体が強化するになるので、あなたは子どものふりをして、真剣に指示に応じて見せよう。

子どもがこの課題を楽しむようなら、ほかにも物の名前付けなど、すでに習得済みの課題を選んで、子どもに先生役をさせるとよいだろう。またサークルタイム課題においても、時々子どもに先生役をさせるとよい。

○袖のあるシャツを着る（D1S3～）

目標：パジャマなど、前をボタンで止めるようになっている長袖の上着を着る。ただしボタンのめ方は別に教える。ここでは袖に腕を通すことを中心とする。

教え方：まず左の袖に左腕を通させる。次にその腕を真上に上げさせる。そうすると身体が右に傾き、もう片方の袖がブランとぶらさがる。そこへ右腕を通させる。このとき手を上に曲げるとうまく行かないので、下に曲げて袖に入れさせるようにする。左腕を真上に上げて身体を右に傾けさせた瞬間に、子どもの右腕を下向きに曲げて、袖の入り口を探らせる。援助が遅れると逆に上向きに曲げてしまい、行動の連鎖がうまく作れないので、すばやく援助する。腕がうまく袖に入ったら、あとは腕を伸ばせば自然に着ることができる。これを何度も繰り返し、徐々にプロンプトを減らしていく。